

なお： それでは、22時になりましたのではじめたいと思います。よろしいでしょうか？

イコ： はい

Akila： はい。

なお： よろしくお願ひします。今回とりあげたのは、ヘルマン・ヘッセ作「デミアン」です。まずはおひとりずつ感想、印象などおうかがいがしたいと思います。あいおえお順でアキさんからお願いします。

Akila： 久々の再読でした。およそ6年ぶりくらい4度目くらいの再読です。今回は割と読みとばしつつも、個々のモチーフを楽しみながらというところでしょうか。デミアンはヘッセの転換期の作品ですが、荒野のおおかみほど暗くは無く、どちらかというと著者の希望が垣間見える作品でもありましたね。

なお： 4度も！しかし確かに私も再読したくなりました。大戦後のヘッセの心境の変化が描かれているのでしょうか？イコさんはいかがでしたか？

イコ： 一度読んだときは、あっという間に読んでしまったおぼえがあります。おもしろかったのですが、ピストーリウスのことをすっかり忘れてしまうなど、作品に対して、きちんと向き合っていなかったように思います。環境や人生の背景によって読んだ作品の印象はかわると思うのですが、今回の再読で、生き方について考えるシンクレールと、自分が大いに重なったところがあり、いちいち立ち止まりながら読まされました。

じっくりと読む……こういう機会を与えていただいて、ほんとうに良かったです。

なお： 確かにジnkレエル（岩波版）の感じ方を自分に照らし合わせてしまいます。本当に素晴らしい作品で私も読んで本当に良かったです。私の感想としては、ヘッセのこの作品がその後の文学に多大に影響を与えたのだな、ということ。特に日本人には受け入れやすい内容だったのではないかと感じました。それでは、内容に移ります。

misty8823： こんばんは！とりあえず感想です！映画のような作品だと思いました。主人公の半生を描く。ジnkレーア（僕が読んだ訳ではそうになっていた）は幼少のころから寄る辺なき、心の不安定さ、すぐに喜んだりすぐに絶望したりといった心象になって、それでそれを埋めようと様々なものに救済を求めたりする。しかし最後はエヴァ夫人とデミアンに救われ、ジnkレーアはやっと巣だっていたかのようなようです。主体の確立。キリスト教の悪魔的場面を強調するというものでは、映画の「エクソシスト」や「オーメン」に近いものがあると思いました。

なお： 今回キーワードをあわせて9つ出していただきました。ミスティさんこんばんは。感想ありがとうございます。

misty8823： よくもわるくもクラシカルで、単線的ではあるけど含みがある。こんな感じです。

なお： アブラクサス、カイン（のしるし）、二つの世界、愛、音楽、ゲッセマネのイエス、ビルドゥングスロマン、キリスト教的世界からの脱却あるいは更新、ファウストがあげられました。このなかで、論じてみたいワードはありますか？アキさん？

Akila： 論じてみたいというか、個人的にはゲッセマネのイエスが気になっています。naoさんの意見をお聞きしたいですね。他のキーワードで個人的に組み合わせてみると、まず、本作はとでもグノーシス的であるということです。グノーシス主義においては旧約の神（創造神）は悪魔的な属性を持ち、当の悪を内包する世界から脱却して至高神の元に辿りつくという考え方を基本的にはしますが、この世界からの脱却というモチーフがエヴァという名前が出てくるように失樂園と重ね合わされているんですね。ただし、厳密にはグノーシスそのものかと言われると疑問があります。アブラクサスとはどうやらグノーシス主義の神の一体でありながら、この悪魔的なデミウルゴス（創造神）と融合を果たしたという話があるみたいなのです。世界からの脱却であると同時にこの世界そのものを受け入れるというのが、グノーシス主義と微妙な齟齬をきたすする気がするんですよ。もう一点、ビルドゥングスロマンと、ファウストの関係です。本作においては明らかに主人公の成長を描いたビルドゥングス

ロマンという形式が採用されていますが、これがデミアンとの契約という形でファウスト的なものとして描かれているということです。シンクレールは物語の最後でデミアンとの融合を果たしますが、もちろんこれこそが契約ですね。ついでに言えば、本作にはデミアンとシンクレールの鏡像関係が見られるということです。カフカでも双子が分裂した自我として登場しますが、精神分析、とりわけラカンの鏡像段階の議論においては、鏡に映った自己像を見て自己同一性を果たしていくというものがありますが、ラストシーンはまさに自我の完成なんですよ。以上です。長々すみません。

なお: なるほど。非常に興味深いです。アキさんからはいつも勉強させていただいております。

misty8823: わしのぼんやりした読みはアツとる！

なお: 齟齬を感じるとおっしゃっていた点ですが、

misty8823: 非常に裏付けられた気がします。

なお: 私はむしろこの作品におけるグノーシスというのは物質世界の本質についての概念を神の意志ではなく、むしろ神から切り離してみる、程度の解釈で臨んだので、デミアンはそういう視点からものをみていたのかな？と感じました。一番、私がデミアン的だと感じたのはカミュの異邦人に出てくる主人公ムルソーです。ここでゲッセマネのイエスがでてくるのですが処刑前夜のムルソーとイエスに共通項をかんじました。つまり「身の回りに冷たい宇宙しかない」＝「自分の運命以外何も望まない」⇒「世界の優しい無関心に」感謝する状態というものです。デミアンも常にそういう状態だったのかな？と。全てに心を開いてはいるが、悲しいほど孤独で完璧な自律状態といえますか。ゲッセマネのイエスは弟子にさえ理解してもらえなかった、その状態がシンクレールと接するデミアンにみえました。ファウストについては不勉強なので、また読みますね！

Akila: 一種の悟りの境地みたいなものですよ。ヘッセは特に東洋思想に傾倒していったはずなので。ファウストは自分も未読ですw ソクーロフの映画を見たくらい。

misty8823: ファウストはイコさんなんでしたっけあのお化けあいつが可愛いですよ。

イコ: メフィストフェレス

なお: 悟りの概念について語りだすとキリがなさそうですが、確かにそれに近い状態かもしれませんよね。

misty8823: そう！

なお: イコさんの意見をおきかせください。

misty8823: メフィストフェレスが裏のドラえもんのごとく解決をしていくのです

イコ: ムルソーとデミアン、ゲッセマネのイエスを結びつけるのはとてもおもしろいですね。

「異邦人」は実存主義的な文学として有名ですが、自分がおもしろいと思うのは絶対的信仰（運命への服従）から脱していく、人間中心主義の思想と、デミアンが絡まっているように思いながらデミアンは、非常に構造主義的な目線をもっているというところです。『つまり人は自由な意思を持ってはいないんだ』（新潮文庫版 84 ページ）とかれが言うように、デミアンは、ことあるごとに、自分で選んでいるようであり、それは意思によって選択したものではない、ということを強調しますね。ここがアブラクサスと結びついていくところが、とてもおもしろいと思うのです。旧来の、「当たり前」とされていることを疑い、疑ったあげくに、「アブラクサス」を見つける。

なお: (ああ、その辺、今読んでる「ハーモニー」/伊藤計劃ともかぶっていておもしろいなあ。⇒意思のくんだり。)

イコ: デミアンはとても魅力的な人物だと思うんです。疑うことができるのは、観察力があるから。デミアンに読心術ができるのも、ふしぎなことじゃなくて、ちゃんと観察しているから。これって大事なことだよなあ、と思いました。当たり前だとされていることをうのみにするんじゃなくて、ちゃんとメタ的な視点をもって生きること。自分のアブラクサスを見つけること。

なお: 自分のアブラクサスを見つけるって、すごく大事なことですよね。なかなかできないのだけれど・・・。

デミアン的に聖書を読み解くと、とても面白くてエバ（命）の子供がカインとアベルなのですが、エバはそのかされた罪の女ではなく、すすんで知識を求めた命なのではないかと。そしてその知識の子、こそがデミアンな

のではないかと。ミスティさんはいかがですか？お二人はなにか、つけたしありますか？いままでで？

misty8823: 『ファウスト』では主人公のファウストが要望する悪事を、メフィストフェレスがケチをつけながら解決していくのですが、例えば第一部ではファウストが望んだことは結局得られないまま終わり、一部もⅡ部も「悲劇」で終わる、という物語です。みなさんの議論が豊富なので、僕がちょっと絡んでみたいと思います。ついでに言えば、本作にはデミアンとシンクレールの鏡像関係が見られるということです。これは絵のシーンで成程、と思い、ベアトリーチェにもデミアンにも僕にも見えるよこの人物、みたいなわけのわからないことを言うシンクレアでしたが、ここはラカン理論だと割と整合的ですね。ちなみに、絵を描くシーンで腕を魅せるの
がいい作家だなと思って、ヘンリー・ミラーなどもその辺りがうまいのですが、絵のシーンは面白かったです。シンクレアはニーチェの愛読者でしたよね。ここはとても難しい話で、僕が一人で説明しきるようなものではありません。おそらく、神の次元と人間世界の次元の並行があって、この時代もこの物語もだいたい人間の世界（若しくは力）だけで進行していくけど、ちょいちょい神の次元が見える。で、これは解説をチラッと見たんですけど、ヘッセはエヴァ夫人という「母性」に重点を置いたらしい。その是非はともかく、エヴァ夫人を介して「母性」という救済点をシンクレアが見つけたのなら、それは聖母マリアの象徴である「母性」、つまり聖なるものでありながらも、いちおう人間側のほうにヘッセは解決点を見出したことになり、実存だとか、ヒューマニズムのラインになぞらえるのだと思います。あとイコさんの構造主義的な思想ということにかんしては、この時代には構造主義こそは無かったけど、確かにデミアンの言う事は異様な新鮮さがあり、いつも普通と思われていることや常識と思われている事柄を疑う性格、という非常に理知的な性格を持った持ち主として、魅力的に描かれていますよね。とりあえず以上です！

イコ: そうなんですよ！ この時代に、そういう思想は確立されてなかった。なのに、まさにそういうことを言っている。これはすごいなあと思います

なお: ありがとうございます。神から切り離してみたというのは私の意見ではなく、多くのグノーシス派の方々のものの見方をわたしなりに一番簡単にまとめただけのものなので、ちょっと論点がずれてしまったかもしれません。書き方が悪かったですね、すいません。さて、この物語におけるもうひとつの大きな柱は戦争の影ですが、大きなパラダイムの転換を迎えた時に人々は混乱し、救いを求めますね。この **great war** がもたらしたものについて、みなさんの意見をおききたいです。あきさん、いかがでしょうか？

Akila: いやなかなか難しいことを w

なお: (すいません)

misty8823: 作品の中では終盤に描かれますよね

Akila: いえいえ w

misty8823: けっこうテキストだけの中で論じようと思ったら難しいかもですね

なお: (ヘッセは明らかに大戦後、精神を病んだらしいんですね) (そのあと書いた一作目がデミアンだったそうです)

イコ: ヘッセは戦争に反対しつづけたんですよ

misty8823: 第一次世界大戦か

なお: そうですそうです>イコさん

Akila: 第一次世界大戦、ですよ。もちろん、ワイマール憲法という非常に民主的な憲法が誕生するのですが、皮肉にもドイツはその後ナチスドイツのよりドロドロした暗黒時代に突入していくという。

misty8823: ドイツ人は大変だ。サブテキストの話題はもちっとあとですよ？

なお: (そうなんですよ…やはりナチは外せないか…となると虐殺器官の会をやったほうがいいかな…?)

Akila: そうか、荒野のおおかみはこの後なんですよ。ヘッセは今後もっと病んでいくわけだ。

なお: あ、そうですね、もう少しあとで！>ミスティさん

misty8823: 車輪の下っていつだろう。調べてみる。

Akila: ガラス玉演戯そのうちありかもですね。

イコ: 戦争によってひとりの人間の精神の遍歴をたどるとか、甘く感傷的なものが吹っ飛ばされてしまう……

なお: (戦争⇒妻と離婚⇒反戦論主張⇒スイスへ移住⇒強いノイローゼ⇒セラピー受ける) このセラピーをもとに精神分析論を学ぶ。

Akila: そういや、数ヶ月前、京大で WW1 のトークイベント行ってきたの思い出しました。

なお: デミアン書くという流れ。

Akila: 京大の教授、助教授の人々は近代の終点として、第一次世界大戦を位置付けていたんですよ。

なお: 近代は神の時代っていうアレですか？

Akila: 一つは大衆の出現。これはデミアンのモチーフでもあったと思いますし。あと市場が世界を覆ったという意味で。

なお: (なるほど…ww確かにミスティさんの言うとおりで。このテキストだけではとても……!)

Akila: それに第一次世界大戦を通して、ヒューマニズムが壊されるというか。人間の野蛮化。

なお: 個人主義の勃興…

misty8823: フーコーが聞いたら反対しそうな説 (笑)

Akila: もちろん、過去にも民間人が虐殺されることがあったものの、それが第一次世界大戦の総力戦によって顕著になった、人間の野蛮化という恐怖が人々に取り憑いたなど。ちなみに「世界大戦」という言葉を初めて用いたのは日本人だそうです。

イコ: へえ～

なお: へえ!

misty8823: 第一次世界大戦後の大きかったアレの一つに、精神分析というものがあると思うんです。フロイトの理論、構造主義を生き伸びたラカン、ラカン派。

Akila: こんなところですかね。

misty8823: それに対応してかわからないけど、精神の時代というか、たしかに未知の事態が起こっているきはします。それをドゥルーズやフーコーは警告したけど、まだはじまったにすぎない。新しいことがゆっくりおこっているのかもしれない (とまとめる私はポストモダなのかな…

なお: ありがとうございます。人間の野蛮化か…。これを経て荒野のおおかみを執筆したんですね。興味深いです。

イコ: ヘッセは時代を考えさせますね。なるほど。

Akila: ちなみに個人的には近代は神の時代というより、自我の時代ですかね。理性と脱呪術化の時代。

なお: ヘッセは「人間性の中の光と闇」を不変のテーマとして掲げているけれども、特にデミアンではせっぱつまっていますものね。

イコ: 近代は自我の時代、そうですねー。

なお: 宗教についての考え方も、変わりますね、デミアン読むと。

misty8823: サブテキストにかかわるんですけども

なお: はい、ではそろそろサブテキストにいきましょう!

misty8823: やっぱり心象風景の細かな動きを描くという点で、夏目漱石の『こころ』とかを思い出んですけど、なんというか、今の人は『こころ』を読むことがそのまま勉強にはならない気がする。つまり、これは問題の発見にはつながるかもしれないけど、難しい……。なおさらキリスト教のあれこれにどっぷり入っている『デミアン』は、読まれるのだろうか……。笑。あ、あと平野啓一郎の『日蝕』なんかも世界観と近かったですよ!

イコ: 日蝕、たしかに。

misty8823: 両性具有とか!

なお: 平野氏の作品は読んだことがないので勉強します。

イコ: デミアンも、男にも、女にも見えるような書き方がされてますよね

misty8823: (デミアン君は性を超越しているのかもしれない)

なお: 私は個人的に桜庭一樹の「GOSICK」がビルドゥングスロマンに入りかつデミアンをかなりお手本に書いたなとおもいました。

イコ: アニメ見ました！

なお: 軽く読めるのでマンガみたいに読むと面白いです。くじょうがシンクレエルでヴィクトリカがデミアンですね。

イコ: そうか、デミアンをお手本にしているのかー、気付かなかった。

Akila: naoさんも挙げてましたが、個人的には服部まゆみ『この闇と光』ですよ。

なお: ああ、あれは絶対に読んでほしい。本当に面白いのが一つと、ほんとにデミアンの中身を理解しないとかけない内容で。

イコ: 読みます！

なお: 角川文庫から出ています。もう亡くなられているのが惜しい作家さんですね。

misty8823: キリスト文化の作家といえば遠藤周作だと思うのですが、みなさんこのあたりはどうですか？ 日本人の、キリスト教文化的作家。

イコ: 遠藤周作はおもしろいですね

Akila: 実は読んだことないです w

misty8823: なにー！笑

なお: 浅学にしてあまり知らないですね…。私も周作読みませんでした……。すいません w w

イコ: 遠藤周作も幼いころに洗礼を受けてから、ずっと身の丈に合わぬ服を着せられるような、居心地の悪さを感じていたそうです

misty8823: ほー

なお: それは感じ方の問題ですか？≫宗教的な

イコ: 「神」が自分にとって、日本人にとってどういう存在なのかを追求しつづけた作家だと思います。そうですね、感じ方として、どうして信じなければならぬだろうか？というような。「沈黙」では、神はなんにもしてくれないじゃん、という、非常にキリスト教的に重要な問題が扱われていますし「イエスの生涯」ではゲッセマネのイエスも描かれています。

なお: 一神教の神って日本人には受け入れがたいものがあるのかもな…。モスリムとかもそうだけど。

misty8823: 『海と毒薬』『沈黙』『イエスの生涯』はぜひとも必読していただきたいです。

なお: 了解です。図書館にいきます！ w

misty8823: 僕ら日本人がキリスト教的なものを考える時に、どうそれと戦ったか、時代と共に、参考になると思います。

Akila: 先ほど指摘しようとして忘れてましたが、カラマーゾフの兄弟のイワンも子供が虐待を受けるような世界を作った神は認めない、みたいなことを述べてましたね。>神は何もしてくれない

イコ: 「海と毒薬」は北杜夫の「夜と霧の隅で」とセットで笑

misty8823: どんどん増えてきた w 『沈黙』は僕は高校の時に読んで、ラストの転回に衝撃を受けましたけどね…。

なお: そう思うとやはり、「夜と霧」をはじめ、フランクルは外せなくなりますね。フランクルの極限の絶望の中からの救いは自己からきてるものだけとは言い難いですね。そうなるとうやほりナチ…

イコ: 沈黙は、めちゃくちゃおもしろかったですね……。 「デミアン」を読むときには連想しなかったけれど、キリスト教と人間の関係について考えるという意味では、いいですね。あと、サブテキストとして、ぜひあげたいのがひとつ。スタインベックの「エデンの東」です。

misty8823: わー

なお: はいきた！エデンの東！！

misty8823: 勉強するものが増えた

イコ: カインとアベルが扱われています

なお: 絶対だれかいうとおもった

イコ: 予想されてたか〜笑

なお: 映画じゃだめかな・・・ww

イコ: 映画は一部（後半）しか描かれてないんですよ〜

なお: 文芸部ですもんね。

イコ: 兄弟の確執が、代をこえてつづくというのがおもしろくて。

misty8823: 映画を語るアキラさんがおられるではないか

Akila: エデンの東まだ見てませんw

なお: 創世記読んでると結局今の人間の先祖はカインのほうですからね。神がエデンの東においやって、勝手にさげやがれというツンデレを働いたというww

Akila: スタインベックの作品としては失敗作とも聞くんですけどね。>エデンの東。怒りの葡萄が最高傑作とも。

なお: カイン（裏切るもの）という名前が人間の本質かもしれませんね。

misty8823: ほうほう

イコ: 失敗作という評価もありますけど、自分はエデンの東、大好きでして。聖書の解釈そのものに言及していくんですね。

misty8823: ほお

イコ: ヘブライ語に「ティムシェル」って言葉があるんですけど聖書でこの言葉が使われている。従来は「運命」とか「服従」のニュアンスで解釈されており、人は神に従わなければならないって教えられてきた。

misty8823: それがティムシェルだよイコさん！とかですか

イコ: ところが、スタインベックは登場人物に語らせて、この言葉は「You may」という意味であると解釈するんです。つまり、「あなたは〇〇をしてもよい」し、「〇〇をしなくてもよい」というんです

misty8823: 自由意志だ

イコ: すべては人間が、自由意思によって選択しているんですよと

なお: どちらかというと仏教みたいな消極さですね。しかしその結果も引き受けるよ？ってことですか？

イコ: カインとして、罪のしるしを背負って生きていく人々が、ほんとうに自分はだめなやつなんだよ、運命はきびしい、と言うわけです。

misty8823: shall という助動詞は神の命令（命法）を含意するときもあるけど、may は確かに完全なる人間の自由だな

なお: ほおお

イコ: けど、だいじょうぶだよ、それは運命なんかじゃない、自分で選んでいこうぜというようなことを言うんですね。

misty8823: スタインベックええやん・・・

なお: 「神の呪い」≡「自由意志の獲得」という感じですかね。聖書的に言うと。とても面白いですね。

イコ: でも代がかわっても、やっぱり兄弟の確執は起こるわけです。ここがおもしろいところで。

なお: カインがカインとアベルをうみ、またカインとアベルを生み…というループですね。

イコ: 運命というか、物語の筋みみたいなものが、登場人物を「アンナ・カレーニナ」のアンナのように、ヘッセの「車輪の下」のように、圧殺しようとするんです。

misty8823: ほうほう

イコ: 「物語」や「運命」と、「自由意思」の対立・相克が、非常に緊張感をもって描かれてるんです。

misty8823: なーる

なお: イコさんの解説で一気に興味を持ちました。

イコ: スタインベックは、聖書をすごく勉強していますね。「怒りの葡萄」は出エジプトだし。

なお: (いつの間にか12時近い!! みなさん大丈夫ですか??)

misty8823: 物事の本質が聖書にはあると思ったわけですね

Akila: また後日続きやります?

なお: やりたいですね。非常に楽しいです。

イコ: たしかに薔薇についてはまだ語られていない……

misty8823: (あっ)

なお: 聖書は私もよく読んでいますが矛盾も多いし、本当に難解です。ヨブ記など、本当に興味深いのですが…。

なお: 派生したテーマがたくさん出てきましたね。みなさんのお話が楽し過ぎますね。

なお: 第二回もデミアン、その後を語るをやりたいですが、いかがですか?

misty8823: どうぞ!

イコ: なおさんの司会が見事だと思います。みんな話せましたね。

misty8823: 頑張っていましたね。拍手!

Akila: ありがとうございます。